



Title	共創的な研究データの収集 : 新型コロナウイルス感染症拡大がもたらした調査手法
Author(s)	澤村, 信英
Citation	未来共創. 2022, 9, p. 330-333
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88564
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

共創的な研究データの収集

新型コロナウイルス感染症拡大がもたらした調査手法

澤村 信英

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のグローバルな拡大は、海外でフィールドデータを収集、研究を行ってきた者にとって、かなり深刻な問題である。当初、数か月から半年もすれば、渡航が可能になると思っていたが、決してそうではなかった。2020年は海外調査が可能になることを期待していたが、2021年はそういうわけにもいかない。他の研究者の経験も参考にしながら、オンラインでの調査により、データ収集する方法を考え始めた。

当初、研究者が行うようなことを現地の協力者に依頼しようとしたが、これはうまくいかなかった。当然ながら、研究者が行う職人芸的な作業を代替して行えるわけではない。私の研究協力者は、ケニアのスラムに暮らす無認可私立学校の校長であり、自身で調査研究をした経験はない。

次に考えたのが、毎日、就寝前に電子メールで日報（daily reports）を送ってもらうことである。起床から就寝まで、当人の行動だけではなく、その時々での学校での子どもの様子や自身の考え方、感情なども含めて、詳しく具体的に記述するように依頼した。この背景には、私の研究関心が学校での活動だけではなく、教師の日常にあることがある。これは想定以上に順調にいったおり、2021年8月から開始し、2022年3月現在まで、一日もたがわず、メールでやり取りをしている。この過程において、表題にあるとおり、まさに研究データを「共

創」するという、これまでフィールド調査を行った際には、ほとんど意識することのなかった感覚をもった。これが『未来共創』誌にエッセイを寄稿したいと思った最大の理由である。

以下、まず、ケニアにおけるCOVID-19の初期的な感染状況と学校閉鎖について紹介する。次に「日報調査法」とでも言うべき手法とそこから得られた成果について、私自身の感想を含めて述べてい。

COVID-19は2019年12月に中国・武漢市で初めて検出された。その後もウイルスは変異を繰り返し、2022年3月現在もその世界的な感染拡大（パンデミック）は収束していない。個人的な経験を振り返れば、2020年2月中旬にはインドネシアで、3月上旬にはケニアでそれぞれ1週間から10日間程度のフィールド調査を行っていた。空港での体温測定などはあったが、入国するにあたって大きな問題はなかった。多少の緊張感があったものの、未だのどかな時期であった。

ナイロビに滞在する3月1日から、国際放送では感染拡大（アウトブレイク）が日々報道されていたが、ケニアでは感染者が確認されていなかったこともあり、路上で見知らぬ男に「コロナウイルス・チャイナ」と悪口を言われたぐらいである。対岸の火事という雰囲気であり、とくに不都合なことはなかった。調査を予定どおり終え、ナイロビを3月10日に出発し、ドーハ（カタール）経由で11日に無事帰国した。

ところが、3月13日にケニアで1人目の感染者が確認され、一挙に風向きが変わった。その後の政府の対応は早く、15日には全国すべての学校の閉鎖を決定し、27日からは夜間外出禁止令の発令、ほぼ同時に都市封鎖も行われた。学校の閉鎖は、当初、30日間の予定であったが、再開の時期は度々延期され、全学年で授業が行われるようになったのは、2021年1月からである。

公立学校はよいのであるが、問題は、都市部で暮らす貧困層の子どもが通う低学費の私立学校である。このような私立学校の多くは、生徒の保護者が払う授業料がほぼ唯一の収入であり、学校が閉鎖されれば、その収入は途絶えてしまう。公立学校の教師は、閉鎖中も

給与が保障されているが、給与の途絶えてしまった私立学校の教師の大半は、生活のためにすでに離職している。また、私立学校は校舎を賃借していることが多いが、閉鎖中の家賃を払えるわけではない。そうすると、もはや学校を再開することもできない。

私は、2014年にケニアの首都ナイロビにあるキベラ・スラムの学校で調査を始めた。市内には10のスラムがあり、なかでもキベラはアフリカにおいて最大規模である。スラムは「貧民街」と訳されることもあるが、ナイロビの住民（約400万人）の6割がスラムで暮らしているといわれており、特別に貧困な人々だけが住んでいるわけではない。これまでの調査により、同スラム内には、少なくとも92の初等学校が運営されていることがわかった。

COVID-19感染拡大前には、少なくとも毎年1回、現地を1～2週間訪れ、教師や生徒に話を聞きながら、フィールドデータを収集していた。しかし、先にも述べたように、2020年3月上旬の調査を最後として、ケニアを訪問することはできなくなった。そこで、フィールドデータが枯渇する中、苦肉の策として考えたのが「日報調査法」である。その際、調査法として価値があるものにするため、フィールド調査が自由にできるようになった後も、有効な調査法として使えるものになることを意識した。

私自身もこの調査法に当初それほど期待していたわけではない。しかし、現地の研究協力者にも恵まれ、日々、それまでの調査で聞くこともなかったような生々しい内容の日報が送られてきた。例えば、ある生徒が空腹のあまりゴミ捨て場で食べ物を探していたというようなことである。これまで現地に出向き、丁寧に聞き取りを行ってきたつもりであったが、1年うちのわずかな日数、さらに1日のうちの数時間だけでは、多くの重要な現実を見過ごしていることに気づいた。毎日受け取る日報には、それまで知らなかったことが丁寧に書かれており、多くのことを日本に居ながらにして学ぶことができた。

一方で、日報を介して、やり取りをする中で、研究協力者側も

研究者の関心を理解するようになり、協力者は私が質問するまでもなく、研究上重要な出来事を日報の中に記入するようになってきた。例えば、全校集会を行ったとだけ書かれていたものが、何を話したのか、生徒の表情はどうだったかなど、詳述されるようになった。その内容は、研究者とのやり取りの中で、質的に豊かになっていくことを感じた。研究協力者も研究者の要望に応えるため、生徒や保護者に直接聞き取りを行うようにもなり、これが相手にとっても新たな知識と経験として、学校の運営に役立つとのことであった。まさに研究データの「共創」を実感させてくれた。このことは、厳しい状況の中で学校を運営し孤軍奮闘する教師を力づけることにもなっているようであり、現地で迷惑ばかりかけてきた私にとっては、うれしいことでもあった。

「共創」という用語は、今では一般に使われるようになったが、海外渡航が制限される中、私自身、研究データを共創的に収集する感覚を持つことに、大きな驚きがあった。それと共に、従来の現地でのデータ収集の仕方に反省する点もある。近い将来、海外調査を実施できることになるであろうが、その際にも、当事者の生活感覚に重きを置き、少しでも共創的なデータ収集を心がけたい。それが研究の質を高めることにもなる。